

ボルノー思想の宗教的特質についての一考察

梅光女学院大学 広岡義之

本小論の目的は、O.F.ボルノー(O.F.Bollnow,1903-1991)の広範な哲学的人間学の根底に存在する「宗教的な特質」を把握することにある。私見によれば、ボルノーの宗教的特徴を論ずる場合、以下の二点が注目されるべきであろう。すなわちまず第一にわれわれは、キリスト教の実存主義に基礎づけられたボルノー思想の宗教的側面を究明しようと試みる。上述のボルノー思想の顕著な特徴とは、「出会い」や「覚醒」という実存的傾向には必然的に、「苦痛性」や「事物の抵抗」という経験が伴うという事実である。このような経験を学んだ後に、人は本来的で充実した人間へと生成してゆくことができる。次にボルノーの宗教的特質の第二の側面についての考察が進められる。それは実存主義克服の試みということばで表現することができよう。ボルノーは、この第二の領域で初めて「新たな被護性」とか「安らいだ気持ち」という概念の意義を論究できると確信している。換言すれば、どのような特定の宗教的解釈の以前にも存在している普遍的な「存在信頼」とでもいうべきものがそこには存在している、と考えられよう。

A Study of O.F.Bollnow's Theory of Religious Characteristic

Baiko Jo Gakuin College
Yoshiyuki Hirooka

The purpose of the present paper is to grasp the theory of religious characteristic which lies in the basis of wide-ranging philosophical anthropology by O.F.Bollnow. In my opinion, when we discuss the religious characteristic of Bollnow's thought, we should take notice of the following two points at issue. First, we try to explicate the religious characteristic of O.F.Bollnow's thought which is founded on the Christian existentialism, in this paper. The distinguished feature of the above-stated Bollnow's thought means that "an encounter" (die Begegnung) or "an awakening" (das Erwachen) is necessarily accompanied by "sharp pain" (die Schmerzhaftigkeit) or "power of resistance" (die Widerstand der Sache). And after learning by such experience, man can become essential and complete human-beings. Then we consider the second side of Bollnow's religious feature which is found in the expression of the trial of overcoming the existentialism. Bollnow believes that the meaning of "Neue Geborgenheit" or "der getroste Mut" can be inquired only in this domain. In other words, Bollnow thinks that there is the so called universal "Seinsvertrauen" (being-confidence) which exists before giving any particular religious interpretation.

ボルノー思想の宗教的特質についての一考察

広岡義之

第一章 問題の所在

本小論の目的は、O・F・ボルノー(O.F. Bollnow, 一九〇三—一九九一)の広範な哲学的人間学の思想の根底に流れる宗教的特質を浮彫りにすることにある。ボルノー自身は彼の哲学的人間学の立場を明確にするために、多くの箇所でもキリスト教神学と一線を画する表現を提示している。そうしたこともあって、ボルノーについての多くの優れた日本での研究論文を一瞥しても、彼の宗教性そのものを研究主題の前面に打ち立てている研究論文は数多くない。ボルノー自身は、いつでも特定の宗教的世界観に立脚することを避ける「開かれた問い」の原理に即しつつ、人間論を展開してきた。この態度は、ドイツというキリスト教圏の国で、また特にチュービンゲン大学という神学研究の中心地

に身を置きつつ、特に「教育学」の学問的独立性を主張してゆく観点からも当然のことといえよう。しかしながら、筆者は特に日本のように人格的なキリスト教的意識の希薄な風土にあって、ボルノーの教育観、人間観を論ずる場合には、たとえ「教育学」の学問的独立性は保持されつつも、ボルノーの思想の宗教的特質というものが、もう少し強調されてもよいのではないかと常々考えている。この点については精神科学的教育学者のW・フリットナー(Wilhelm Fritzer, 一八八九—)やE・シュプランガー(Eduard Spranger, 一八八二—一九六三)の思想研究にも同じようにはまるように思われる。当然のことながら、安易な態度でボルノー思想の宗教性だけを強調することはかえってボルノー思想の真髄を歪曲化する恐れを孕むが、そ

のことを十分承知しつつ、それにもかかわらず筆者としては、特にボルノーの人間学の根底に横たわる、「真実の人間性に不可欠なものとしての宗教性」について彼がいかに苦心して取り組んでいるかを、二つの側面から論究してみたい。第一のそれはキリスト教的実存主義を基盤としたボルノーの実存的宗教性の解明であり、第二には実存主義克服の試みを通して滲み出てくるボルノーの宗教性の把握である。

さてこの第一の領域は、**実存哲学(主義)**の思想圏内で培われたボルノーのキリスト教的な宗教性である。もちろんボルノー自身も、**実存哲学**の成果でもってすべての現在の教育問題に対する究極的な解答が与えられるとはけっして確信していない。「それどころか、かえって、**実存哲学**の宿命的な偏向性と、それをのりこえていかなければならない必要性を、あくまで自覚している。しかし、それにもかかわらず、**実存哲学**のかたわらを通りすぎることはできない。なぜなら、**実存哲学**は、それ以後のあらゆる改良の考案がまず一度はそこに当たってみなければならぬほどに明確で見通しのきく姿において、あたらしい見地が決定的に出現したものであるからである」¹ (傍点筆者)、と自らをして**実存哲学(主義)**の重要性を語らしめている。

そのことを踏まえたうえで、ここでのボルノーの実存主義理解の顕著な特徴は、自己自身の決断や自己投入という心的態度のうちに生ずる「出会い」や「覚醒」体験である。そしてそこでは必然的に「痛み」や「辛さ」「苦痛性」「仮借なさ」「抵抗経験」といった事柄が伴い、そのような経験を経た後に、本来的で充実した実存としての自己が獲得されゆくという。その意味で、ここでは「仮借なさ」や自己の立場の選択を迫る厳しく辛い「出来事」や「経験」を基盤として成立する実存的な宗教的特質が浮彫りにされ、またその意義が深く究明されねばならないだろう。

しかし同時にここで第二の領域が出現する。それは第一の領域とはまったく異なった、この実存主義だけでは捉えきれない「**実存主義克服の超越的な領域**」であり、ボルノーはそれを「**新たな被護性**」とか「**安らぎ**」「**健全な世界**」などということばで表現してゆく。当然のことながら、ボルノー自身は彼の哲学的人間学の「開かれた問いの原理」(Offenes Prinzip)に忠実に従うために、特定のドグマ的宗教というものを極力回避しようとする。しかしどのような特定の宗教的解釈の以前にも存在している生と人間と世界を共に包括している「**普遍的な存在信頼**」(Seinsvertrauen)とで

もいうべきものを認めるボルノーは、こうした存在信頼はすべての人間の生に対する必然的な前提条件であるとの確信にいたる。この存在信頼とは、たとえば人間の健全な発達に必要不可欠なものであり、安らぎを抱かせる「雰囲気」、さらにはあらゆる脅威のなかでも感じとれる「健全な世界」での被護性とも言い換えることもできよう。

このボルノーのいう「敬虔」や「安らぎ」の雰囲気の強調は、サルトル(J.P. Sartre, 一九〇五—一九八〇)の「無根底性」(Grundlosigkeit)やカミュー(A. Camus, 一九一三—一九六〇)の「不条理」(Absurdität)の概念、つまり「いかなる思慮深い備えをもつてしても防ぎえない威嚇的な、現存在の不気味さの経験」を盾に振りかざす無神論的実存主義へのボルノーの確固たる反論の「のろし」とも受け取ってよからう。上述の純粹な非合理主義もしくは無神論的実存主義からは、たとえ異常な生活気分に墮落しないとしても、ただそこには消極的で疲弊した態度と無責任さしか残らない。そこでボルノーによれば、世界を秩序づけ、形成し、自らの生活を放棄することを欲しない者は、「悟性の力を信ずる最小限の信仰すらもたないということでは済まないのである。かくしてこの面からして

も、悟性の働きを新しい基盤から新たに獲得するという課題が生じてくる」。(傍点筆者)のである。

第二章 ボルノーのキリスト教的実存主義を

基盤とした宗教性について

第一節 実存的な「出会い」概念

それではここでボルノーの主張する実存哲学の特質とはどのようなものであろうか。そこで本章ではボルノーの実存思想に脈々と流れる宗教性に焦点を絞って、彼の実存主義理解と宗教性との関わりについて「出会い」と「覚醒」概念を中心に論じてゆくことにする。ところで、ボルノーによれば「出会い」概念の明確な出現は一九二〇年の初期に遡り、それは即ち、ブーバー(M. Buber, 一八七八—一九六五)の名前と結びつくことになる。ブーバーによれば、「汝」は真正で独立した、けっして「私」に還元できない所与である、という。この言葉の意味するところは、「一切の現実的な生は、孤立して存在する体験者によってはとらえられない」(中略)『私』と『汝』との、邂逅にもとづいて「私」と。また、ボルノーはブーバーの次の言説を引用する。「人間は、自己の対峙者としての、つねにただ一つの實在としての、存在・生成に出会う。(中

略)そこでは計量も比較も消えうせている」⁷。と。こうしたブーバーの、計量も比較も消滅する「我ー汝」という根源語とは一体、何であったのだろうか。ブーバー研究家の平石善司によれば、ブーバーはそれをヘブル精神の伝統にもとづき、端的に「神の言」と同義的に理解していた、という。「このことは彼が根源語にしばしば『神聖な』という形容詞をつけ、(中略)また根源語『われーなんじの原型を』われ」と『永遠のなんじ』としての神との関係のなかに求めることからみても明らか」⁸。であると述べている。いずれにせよ、「汝」とのこうした出会いに到達することは、「私」の側からはけっして予測できないし、企画や努力によってもむりやり導き出せるものでもない。ボルノーによれば、ブーバーの「出会い概念」は、「私」の側からみれば、深く恵むところの経験であり、この出会いにおいてのみ、「私」は自己自身を見出し、その生を充実させることができる、という。すなわち、「すべての出会いは、結局のところ、人間にあたえられる賜物である。ブーバーが宗教の領域からとった概念でいいあらわしているように、すべて出会いは恩寵である⁹。」と。こうした他者との出会いによって、人は

「従来の観念で予期していたのとはまったく異なつたもの」¹⁰。に出くわす。この「度の強い非連続的な出来事」である出会いは、「人をこれまでの発展の道筋から投げ出し、あらたにはじめからやり直すように強いるものである」¹¹。また出会いとは、「人間を仮借なく彼の実存の要求の前に立たせる前目的な衝撃を意味している。(中略)すなわち人間は出会いのなかで耐えることにおいてはじめて彼自身になるのである」¹² (傍点筆者)と。さらにこの実存的な意味での出会いにおいて「人間は、運命的におのれに立ち向かつてくるものを通して徹底的な転換を余儀なくされるので、このようにしてのみ人間はおのれの本来の自己を実現しうる」¹³のである。つまりここでボルノーのいう出会いは、「本来的自己」へと決断を強いる仮借なき他者との遭遇であり、「思いがけなき」を含むものであり、ボルノーはその特徴を「事物の抵抗経験」として総括している。

ブーバーに続いてその後まもなくゴーガルテン(Gorgarten, 一八八七—一九六七)が出会いの概念を弁証法神学との関連において導入した¹⁴。ボルノーはかれの特徴を次のようにまとめている。ゴーガルテンは「自我の自己展開を説く観念論的な考え方に對して、出会いによって自己自身になるという、まったく異なつ

た可能性をつよく主張する¹³。つまりゴーガルテンにとつては「われわれの内なる神」と名づけることによつて自我が実現するのではなく、自我は「汝」との出会いによつてのみ実現するものと考えられていた。

ボルノーは次にグアルディニ(R. Gardini, 一八八五—一九六八)の『陶冶説の基礎づけ』(一九三五)に依拠しつつ、出会いを人間がある特定の状況と出会うこととして捉えている。それゆえ「グアルディニにおいては、出会いの概念は、陶冶という事象をたんに体験的、自己開發的な人間の面からのみ考察する、教育学上の主観主義に対抗し、出会いにおいて人間にたちあらわれる現実のきびしさを、かかる主観主義にたいして強調する使命をもっている。」¹⁴(傍点筆者)さらにボルノーは一九四五年、第二次世界大戦終結による一切の秩序と理性の崩壊後の状況のなかで、特に弁証法神学の領域から生じた「神との出会い」という新しい用語法の口火をもつてして、出会い概念の第二段階と位置づけた。数十年前であるなら、おそらく「宗教的体験」と表現されたであろうこの漠然とした表現にとつて代わつたこの「神との出会い」の意味するものは、やはりここでも「人がそれによつて、全然快適でなく、かたくてごつごつしており、仮借なき要求を

もつて人間に要求しつゝ迫る、一つの實在」¹⁵(傍点筆者)に他ならなかつた。

このように実存的な「出会い」概念の解釈にはかなりの幅があるものの、先に言及されたいずれのキリスト教思想家にも共通な出会い概念は、「他者」や「神」との妥協を許さぬ要求、自己の態度の変更、まどろみからの「目覚め」、さらには「仮借なき要求」や「苦痛性」などがその核心に含まれている、ということをもつてボルノーは確信している。そしてこのような実存的な「出会い」概念の核心は、また必然的に実存的な宗教概念である「覚醒」の問いへと収斂してゆくものと思われる。

第二節 宗教的概念としての「覚醒」

そこでボルノーは概括的な覚醒概念を踏まえつつ、宗教的な「覚醒」概念の特徴を次のようにまとめている。まず覚醒は、「あるべきでない状態」から「あるべき状態」への移行行きであり、この二つの状態は程度の差ではなく、質的に異なる断絶の性格を帯びている。次に時間的な意味では、当該の出来事が人間に対して突発的に生ずるがゆえに、ボルノーはこれを実存的な「非連続性」として捉えている。それとの関連で、

人間に対して外から介入してくる事象がある種の「痛み」を伴ってやってくる。¹⁶

罪の眠りからのめざめについて、新約聖書「エペソ人への手紙」第五章十四節は、「眠れる者よ、めざめよ」とわれわれに訴えかけてくる。¹⁷ また「敬虔にして覚醒した人間」について、福音主義・キリスト教界で語られる場合の「覚醒者」とは、ボルノーによれば、「ある一定の、たいていは時間的に正確に規定しうる、回心の体験によって、これまでの罪ふかい生活から引き離され、自己の真なる信仰に到達した人のこと」¹⁸ を指し示す。いずれにせよ、「覚醒」とは、「時間的に厳密に規定された出来事であって、人間を一回的かつ決定的に変化せしめるものであり、したがって、実存哲学の解釈とはまったく異なっており、人間を究極的に生の新しい立場へと転ぜしめるものである」¹⁹。

以上が覚醒における宗教的側面であるが、ボルノーはこの覚醒概念を教育の分野にも転用することによって教育学に実り豊かな影響を与えようと試みた。その際ボルノーは、この「覚醒」概念を教育学の領域で考へる場合の出発点は、「教育はつねに覚醒である」と主張したシュプランガー(E. Spranger, 一八一六三)から始まると考えている。そこでボルノーはいう。シュプ

ランガーは、「宗教上の用語から転用されたこの概念「覚醒概念の意：筆者註」を教育学に取り入れて教育学の観点からじっくりと考慮した、最初の人²⁰であった、と。そのシュプランガーにとって教育上の最も重要な課題とは、良心の働きを通して形而上学的な諸力が人間の魂の働きのうちに発現することであった。そして他の人々のうちに既にずっとまどろんでいたものを辛抱づよい「問答」によって引き出すことを可能としたソクラテス(Sokrates, B.C. 四六九—三九九)の「助産術」こそが、シュプランガーの「良心の覚醒」概念を支える基盤である、とボルノーは理解していた。それとの関連で、ボルノーはデルボラフ(J. Dethlefsen, 一九二二)を援用しつつ「他の人のうちに、なんらかうずもれた仕方、すでにずっとまどろんでいたものを、辛抱づよい問答によってこの人間のうちにあらわにする術」すなわち、ソクラテス的な「問答法」の重要性を指摘している。デルボラフによれば、学習とは、子どものうちにまどろみ潜んでいる洞察を覚醒することに他ならず、それは年下のものが年上のもの助けを借りて引き起こすべき「自己発見の驚き」に他ならない。

以上がキリスト教の実存主義を基盤としたボルノー

思想の宗教性の解明であった。しかし、人間の「本来的な生」の獲得には先に言及したような実存的な宗教的態度の他にもう一つの宗教的態度が必要不可欠である、との見解が次の第三章以下のボルノーの論点である。そこで初めて「実存主義克服」の問いが生じてくるのである。

第三章 ボルノーの実存主義克服における

宗教性について

第一節 実存的不被護性から新しい被護性への転換

ボルノーによれば、実存哲学の限界は特に、倫理的な面で最も明確になる、という。たとえば実存哲学の危険と無謀な自己投入への喜びは、自己享樂という新しい形式へ再び墮落する危険性を孕んでおり、この実存哲学の限界を突破しうる可能性は、絶望から「新しい信仰」へ移ってゆく選択の内しか存在しないと考えるボルノーは、次のように述べている。すなわち、

「極度の絶望の危機的な時期に、純粹な実存への復帰が最後の庇護であるとしても、新しい現存在の建設は、やはり新・獲得された信仰の力があってこそ成功する」²¹ (傍点筆者) のである、と。たとえば、キルケゴール (Soren Kierkegaard, 一八一三—一八五五) の

全思索が、信仰と絶望の両極をめぐる関わりのなかで、ついには新しい「敬虔」(Glaedigt)へと突き進まざるをえなかったことを考え合わせても、信仰や敬虔の支えのない「実存的決意性」や「自己投入」の空しさが明らかなものとなるだろう。

さらに実存哲学の限界は、「現実性」との関係でも指摘することができる。「担い支えるすべての客観的諸関係のうちで失望し動揺するとき、人間はおのれ個人の实存へと投げ戻され、そのことによって、周囲を取りまく世界の一切の現実性は失われてしまう」²² が、実存の拠点が再び発見された後は、そこから価値のある有意義な現実との担い支える関係が人間の外に新たに存立するようになる。そのときに、「この現実性との純粹な関係は、証明可能な普遍妥当性の面では獲得されず、実に自分自らの自己投入においてのみ、また新たに覚醒された敬虔という基盤のうえでのみ獲得される」²³ (傍点筆者) ことが明らかになる。

こうしてボルノーの思想を注意深く分析してみるならば、ボルノーは実存主義の正さを保持しつつも、なおかつ実存哲学の逃れ難い限界を乗り越え、実り多い探究をするうえで、一つの可能性の端緒として、「信仰的・宗教的」概念の不可欠さを論点の節目節目で必

ず強調していることが浮彫りにされよう。ボルノーによれば、内奥の孤独な自我の実存哲学的な孤立化を克服して、人間の外に置かれている「現実」との関わりへと導いてゆくこと、つまり、実存哲学では等閑にふされていた生の他の領域は、「信仰」とならんで、愛と感謝をこめた「信頼」あるいは「未来への希望」という概念で言い表すことができる。こうした観点に立つて近代の思想界を眺めるならば、たとえば晩年のリルケ(R.M.Rilke、一八七五—一九二六)やハイテッガー(Martin Heidegger、一八八九—一九七六)の思想的

「転向」とか、ベルゲンクリューン(W. Bergengruen、一八九二)の完全に「健やかな」世界の発見という「信仰的・宗教的」概念の芽生えの端緒をボルノーはけっして見逃しはしなかった。

そこでわれわれにとつてここでの焦眉の問いは、「実存的孤独の足かせ」を断ち切って、人間の外部にある実在との「支持的な関連」を再び取り戻すこと、と言明できよう。この「支持的な実在」(eine tragende Realität)とは、要するに人間が信頼できるものとして意味と内容を兼ね備えているすべてのものを指し示す。換言すれば、「実存的に圧迫する人間現存在の不被護性(Ungelborgenheit)の経験から、被護性(Ge-

borgenheit)という新しい感情へいたる道」²⁴だけが実存主義克服の突破口となりうる、と考えるボルノーは、そこからもっと高い平面で実存的経験を和解させる必要性を唱えた。「それゆえ、誤解する者もあるだろうが、実存的な不被護性から、むぞうさに新しい被護性へ移り行くことではなく、不被護性の面から一方的に見られていた半面の真理の代わりに、両面を包括する完全な真理を設定すること」²⁵こそがここでの焦眉の課題となる。

どのような特定の宗教的解釈の以前にも存在している基礎的な存在関係を、「存在信仰」(Seinsvertrauen)と定義するボルノーはこれとの関連で次のように述べている。すなわち、「信仰の概念を特定の宗教的信仰という意味に極端に狭められる危険がなければ、存在信仰と似たような意味で、存在信仰(Seinsglaubigkeit, 「存在敬虔」と呼ぶこともできるであろう」²⁶と。ボルノーがこの「存在信仰(信仰)」について考察を進める場合、これはすべての人間の生にとつての必然的前提条件となるはずであり、それゆえにこそ逆にこの存在信仰の喪失は必然的に、自らの「絶望」と直面せざるをえなくなる。

第二節 「存在信頼」の芽生え

——近代の文学者たちの証言より——

こうしたボルノーの希望や存在信頼(信仰)の概念には、実存主義克服のための「新しい被護性」を取り戻す端緒が含まれているように思われる。現代の混沌の時代にあつて、特に文学の側でこうした感謝に満ちた「存在の被護性」の感情が目立ち始めている、とのボルノーの指摘は鋭くかつ興味深い。²⁷

ところでボルノーは「詩人」というものを、「後につづく哲学的発展の先駆者」として位置づけている。なぜなら、詩人たちは体系的な思索の重苦しさにわずらわされる必要がないうえに、厳密な概念規定の構築にとらわれることなく、いつでも新しい存在経験の可能性を追究するなかで、緩慢な哲学的熟考に有意義な示唆を与えてくれるからだという。具体的にボルノーは最近の文学、とりわけ近代の抒情詩と、晩年のハイデッガーを任意に取り上げて、「あらゆる恐怖の経験をへたあとに存在肯定の新しい感情、つまり、人間固有のあるがままの現存在と人間が遭遇する世界にたいする喜ばしい感情に満ちた賛同が目立ちはじめた」²⁸ことを指摘する。さしあたり、特に二人の詩人、リルケとベルゲングリューンをとりあげて論が展開されて

ゆく。

「健全なもの」の経験が、特に現代文学のなかで顕著になり始めたことは、実存主義的立場の克服の端緒が開かれはじめた重要な兆候であると思われる。特にベルゲングリューンが彼の最後の詩集『健全な世界』(Die heile Welt, München, 一九五〇)の表題で、「健全なもの」を讃え、そのなかの詩の一節、「幾重もの環の奥深くもともつと内なる環のなかで、それらの中核は安らいで健全にやすらう」(ベルゲングリューン前掲の詩)と歌うとき、まだ特に直接的にキリスト教的な概念は入り込んではいないものの、そこに人間の魂の「永遠の健全性」を求めていることは容易に推察できよう。さらにボルノーは、ベルゲングリューンの先述の詩集、『健全な世界』の一節、「苦痛から生じたものは無常であった。そして、わたしの耳にしたのは讃歌のみであった。」という告白を援用して、これは安直な楽天主義的思想ではなく、むしろ、深い「感謝」の感情を歌いあげた点で、リルケと一脈通じうる存在であることを強調する。²⁹

さらに上述したベルゲングリューンの「健全なもの」の意義が、実存的硬直を乗り豊かに乗り越えていった晩年のリルケとみごとなまでに符合することにボルノー

は着目して以下のように述べている。³⁰ リルケも晩年には絶えず、「健全なもの」において、新たな存在経験のやむにやまれぬ表現としてこの言葉を発していたが、リルケにおけるこの「健全なもの」の概念は、言葉の根源的な意味での「聖なるもの」(das Heilige 「健全なもの」)であり、さらには極めて慎重な言い換えではあるが「神」という言葉を明確に使用している。すなわち、「人間に現存している、本源的全体性の分裂と破壊とに反して、いまや神が、この『健全であること』の源泉と、また、失われてしまった全体性が回復される場所と呼ばれ、それゆえまた、『癒す場所』と呼ばれている」。³¹

またボルノーによれば、実存的絶望のあらゆる深淵を自らくぐり抜けた詩人リルケの晩年のフランス語による詩において、この新しい「生の感情」が納得のいく表現に達しており、この詩の行き着く先は、最終的なリルケの最後の遺言ともいえる、「われわれの最後から二番目のことばは悲惨の一語であってもよからう。だが(中略)一番最後のことばは、美しい、であれ」³²(フランス語による詩集)という詩句である。ボルノーはここにリルケの「実存的否定の克服」の問いかけを看取するのである。

いづれにせよリルケほど、一切の実存主義的不安と絶望とを切り抜けた詩人はいないが、彼はその長い人生航路の果てに次のような思索に辿り着いた。これとの関連でボルノーはリルケを援用して次のように述べている。すなわち、「神を見出すためには、人は幸福でなければならぬ。なぜなら、自分の困窮から神を勝手に創り出すような人は、気忙しく先を急ぐからである(中略)」³³と。ボルノーによれば、リルケが「神」という言葉を使う際には、それは人間の外部にある、すべての「支持的な実在性」に該当するとし、そこからボルノーは「神を見出すためには、人は幸福でなければならぬ」というリルケの命題に依拠しつつ、「幸福」とは「恩寵」のような形でのみ、人間に授かる宗教的な思想であることを明確に指摘している。

次に、ボルノーは実存主義克服のための第三の証人としてベルゲングリューンとリルケに続けてハイデッガーを援用する。周知のごとく、彼の旧著、『存在と時間』(Sein und Zeit)のなかで展開された「窮迫した時間性」の世界では、たしかに「健全なもの」の概念はまったく入り込む余地は残っていなかった。なぜならハイデッガーは、「人間の生は、まさに世界の無気味さとそのなかで基礎づけられた人間の非全体・存

在から捉えられ、したがって人間は、自己の全体性を死のなかにのみ見出すことができる』³⁴と考えていたからであった。しかし刮目すべきは、その後の晩年のハイデッガーが、特にヘルダーリン(Friedrich Holderlin, 一七七〇—一八四三)研究を通して、『帰郷——親近者に寄す——』という詩の解釈において、『晴れやかなもの』という生の肯定的理解の意義を歌いあげるといふ、その思想的転向である。ハイデッガーによれば、「晴れやかなもの」の概念とは、いかなる外的脅かしによっても秩序が乱されず、それゆえに自己の本質の全体性に発展してゆくものである。この意味で、彼の「晴れやかなもの」は同時に「至高なもの」であり、リルケのいうところの本源的な意味で「癒するもの」(Gas Heilend)とも結びつく。これとの関連でボルノーは次のように述べている。ハイデッガー的に表現すれば、『晴澄は根源的に癒す』と要約することができるのである。晴澄は、こうした意味で『聖なるもの』(Gas Heilige)それ自体である』³⁵と。

またハイデッガーによれば、『至高なるもの』と『聖なるもの』とは、詩人にとっては同一である。すなわち、清澄である。それはすべて喜ばしきものの根源として、最も喜ばしきものである。その中において、純粋な晴朗化の作用が行われるのである。この『至高なるもの』の中に、かの高き存在者、すなわち『聖なる光の喜戯』によって喜ばされたもの、すなわち、喜べる存在者が住まうのである』³⁶と。このハイデッガーの言説のうちに、『存在と時間』での世界の無気味さのなかで基礎づけられていた人間存在の定義が百八百度回転し、「至高なるもの」「晴れやかなるもの」という宗教的なものによる人間の生の肯定的理解の重要性がもののみごとに打ち出されている事実にわれわれは注目すべきであろう。

もちろん、この二人の詩人の個人的な「言葉」は、他の反対の立場の詩人の思想と対抗させうるのではないかという異論も出されようが、しかしボルノーはその異論に対して次のような明確な反論を展開する。もちろんこの二人の詩人の言葉は普遍妥当的拘束力をもっているとはいえないものの、しかし彼らの言葉は、「そこに被護性の或る新しい経験がぎざしはじめていくことの、最初の予告的な指摘として、利用されてもよいであろう」³⁷(傍点筆者)と。またハイデッガーの「ヘルダーリン理解」についても、先の二人の詩人の世界理解と同様、ボルノーの実存主義克服の一端緒の優れた具体例として取り扱われてしかるべき性質の

ものであると思われる。

このように、ボルノーにおいて初めて、「幸福な信頼」と「深い被護性」の存在規定の究極が、「健全なもの」(das Heil)という概念でまとめあげられたのであり、その「健全な」という言葉は、いつも砕かれず、傷つけられずにいる「砕けやすいもの」「傷つきやすいもの」の象徴であり、それをさらに宗教的な意味に結びつけて、「人間のもつ最も深い生がかけられている、威嚇からの脱出として——、『魂の救い』(Heil der Seele)³⁸」として捉えることにボルノーはみごとに成功したのである。こうしてボルノーの功績と独自性は、現代の思想界の視野ではこれまで十分に取り上げられてこなかったこの「健全なもの」という概念を、文学や哲学思想の重要な兆候としてけっして見逃すことなく、「実存主義克服」の切り札として浮彫りにした点にあるものと言えよう。

第三章 結論

以上、述べてきたようにボルノー思想の第一の宗教的特質は、キリスト教的実存主義を基盤とした主体的決断や自己投入との関わりで経験される「出会い」や「覚醒」の内に顕著に読み取ることができた。そして

これらに共通の特徴は、そこでは実存の真実をめざして生きようとする人間にとって、「苦痛性」や「仮借なさ」、「抵抗経験」などを回避することはできないという現実認識であった。そこではむしろ、人間は今までの古き非本来的な自己の在り方の選択を迫る厳しい辛い「出来事」をとおして新しく生まれ変わり、さらには本来的な自己を獲得するにいたる。たとえば、キルケゴールにとって「実存」することは究極的には「宗教的に実存すること」であり、さらにはいえば「キリスト教的実存」を成就することに他ならなかった。『おそれとおののき』³⁹においてキルケゴールは、信仰の父と呼ばれたアブラハムの物語を引用して宗教的実存の特質をもののみごとに明示した。アブラハムは百歳になってようやく得た独り子イサクの命を捧げるように神から命じられたが、この神の命令とは、父の手で愛する息子を殺すことに他ならず、それは倫理的にみれば人殺し以外の何ものでもなかった。しかしそれにもかかわらずアブラハムはイサクを再び受けることだけを信じて神の命令にどこまでも絶対的に従うこととなる。⁴⁰アブラハムにとって、これほど不条理で納得のいかぬ「痛み」と「仮借なさ」を伴う「突発的な出来事」はなかったはずである。キルケゴールはこの

得のいかぬ「痛み」と「仮借なさ」を伴う「突発的な出来事」はなかったはずである。キルケゴールはこのアブラハム物語をとおして、こうした実存的な決断の「痛み」や「仮借なさ」という「抵抗経験」を経ることによってのみ、主体的真理としての「信仰」あるいは「実存的な宗教性」が人間の魂のうちに生ずることを表現しようとしたものと思われる。まさに一切の現実的なものは合理的には探究しがたい逆説的な真理なのであり、ボルノーの実存思想の宗教的特質について特に「出会い」と「覚醒」概念における「仮借なさ」「苦痛性」「突発性」という概念がいかに実存的かつ主体的な宗教性と密接に関連しているかがうかがわれよう。

そして第二の領域では、実存主義克服との連関でボルノーの宗教性が「新しい被護性」という観点から論究されてきた。ここでは、特にベルゲングリユーンとリルケの詩、さらにはハイデッガーのヘルダーリンの詩の解釈を中心に、文学の世界に芽生え始めた「実存主義克服」の試みとしての宗教性を絞って論が展開されてきた。ボルノーが、実存哲学（主義）がぶつかる限界は「絶望から新しい信仰へと移ってゆく地点にある」⁴¹（傍点筆者）と本小論の冒頭でも述べたが、

それは以下のことを意味するだろう。すなわち、実存主義的思考のある局面は、現代の人間が直面した危機的状况の「象徴化」に他ならなかった。しかしこうした状況下でもなお、人間の「生」が可能であるのは、一種の「信頼」に支えられていたからである。ボルノーが一貫して強調してきた「存在信頼」あるいは「存在肯定」の概念は、近代の文学者たちが、彼らの「実存的経験」をくぐり抜けた後に到達した一つの「境地」であったとも言えよう。逆に、この存在信頼の喪失は、人間を絶望へおとしめることになった。この存在信頼の究極の根底とはいったい何かを存在論的につきつめてゆくところに、ボルノーは近代の文学者たちのいう「健全なもの」という存在論的な主題を発見したのであった。⁴² 本小論ではもはや扱えない主題だが、この「健全なもの」は、やがて「空間性」の分析を介して故郷喪失の克服としての「家」の問題へと直結するし、このことはさらにハイデッガーの「回転」以後の「住むこと」の存在論的問題性へと発展してゆくが、これは他のところで論究される重要な人間存在の課題となるろう。

以上ボルノーの広範な思想のごく一端が論究されたにすぎないが、その究極の根底においてボルノーの宗

教的特性が彼の言説のいたるところに織り込まれていることがよほどにはあるが明確にされてきたように思える。本小論ではきわめて限られたボルノーの哲学的人間学の主題に横たわる「宗教性」しか論じることができなかったのも、今後の課題としてはボルノーの広範な哲学的人間学の主要テーマに含まれる宗教的特質を、他の思想家との比較などによってさらに包括的に論究してゆきたい。

註

- (1) O. F. Bollnow, Existenzphilosophie und Pädagogik. Versuch Über unsteigen Formen der Erziehung. Kohlhammer, Stuttgart, 6 Aufl., 1984, S. 21.
 峰島旭雄訳、『実存哲学と教育学』理想社、一九八七年、第一三刷、二一九頁。
- (2) O. F. Bollnow, Existenzphilosophie. Kohlhammer, Stuttgart, 8 Aufl., 1978, S. 132
 塚越敏・金子正昭訳『実存哲学概説』理想社、一九七六年、第一二刷、二二三頁。
- (3) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 133. 邦訳三四一五頁。
- (4) O. F. Bollnow, Existenzphilosophie und Pädagogik, S. 88. 邦訳一四二頁。
- (5) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 89. 邦訳一四二—三頁。
- (6) 平石善司著、『マルチン・ブーバー』創文社、一九九一年、一刷、七六頁。
- (7) O. F. Bollnow, Existenzphilosophie und Pädagogik, S. 89. 邦訳八九頁。
- (8) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 99. 邦訳一五九頁。
- (9) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 99. 邦訳一六〇頁。
- (10) ボルノー著、「出会いの問題」『文化と教育』（日独協同研究誌）、一九八六年、東洋館出版社七号、一〇頁。
- (11) ボルノー著、前掲書、一二頁。
- (12) O. F. Bollnow, Existenzphilosophie und Pädagogik, S. 89. f. 邦訳一四四頁参照及び「出会い」の問題をキリスト教教育との関わりで、キリスト教神学の立場から詳細に検討している文献としては、以下のものを参照のこと。
 山内一郎著、『神学とキリスト教教育』、日本基督教団出版局、一九七三年、初版、第二部第二章、「出会いとしてのキリスト教教育」、一一〇

- 軸として、きわめて興味深い論究が展開を
つらぬ。
- (13) O. F. Bollnow, *Existenzphilosophie und Pädagogik*, S.90. 邦訳 一四四頁。
- (14) O. F. Bollnow, a. a. O. S.93. 邦訳 一四九頁。
- (15) O. F. Bollnow, a. a. O. S.94. 邦訳 一五三頁。
- (16) Vgl., O. F. Bollnow, a. a. O. S.47. 邦訳 七三頁参照。
- (17) O. F. Bollnow, a. a. O. S.48. 邦訳 七五頁。
- (18) O. F. Bollnow, a. a. O. S.48. 邦訳 七六頁。
- (19) O. F. Bollnow, a. a. O. S.51. 邦訳 八〇頁。
またこの覚醒やホルノーの宗教性については、別の角度から論じたものとして、拙論『道徳教育』武安宥編著、福村出版、一八三頁―一八八頁を参照のこと。
- (20) ホルノー著、森田孝・大塚恵一訳編、『問いへの教育… 哲学的人間学の道…』川島書店、一九七八年、第二版、五〇頁。
- (21) O. F. Bollnow, *Existenzphilosophie*, S. 131. 邦訳 一三二頁。
- (22) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 131. 邦訳 一三三頁。
- (23) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 132. 邦訳 一三二頁。
- (24) O. F. Bollnow, *Neue Geborgenheit. Das Problem einer Überwindung des Existentialismus*, Kohlhammer, Stuttgart, 2 Aufl, 1960, S.23.
須田秀幸訳、『実存主義克服の問題… 新しい被護性…』未来社、一九七八年、第三刷、二〇頁。
- (25) O. F. Bollnow, a. a. O. S.24. 邦訳 一二頁。
- (26) O. F. Bollnow, a. a. O. S.25. 邦訳 一二頁。
- (27) Vgl., O. F. Bollnow, a. a. O. S.26. 邦訳 一三〇頁参照。
- (28) O. F. Bollnow, a. a. O. S.26f. 邦訳 一三〇頁。
- (29) Vgl., O. F. Bollnow, a. a. O. S.26. f. 邦訳 一三〇頁参照。
- (30) Vgl., O. F. Bollnow, a. a. O. S. 159. 邦訳 一八二頁参照。
- (31) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 161. 邦訳 一八四頁。
- (32) Rilke, *Gedichte in französischer Sprache*. Wiesbaden 1949. S.10. in O. F. Bollnow,

- (32) Neue Geborgenheit. S.27. 邦訳、三二頁。
- (33) Rilke, Gedichte in französischer Sprache. in O. F. Bollnow, Neue Geborgenheit. S. 149. 邦訳、一六九頁。
- (34) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 161. 邦訳、一八四頁。
- (35) M. Heidegger. Erläuterungen zu Holderlins Dichtung. Frankfurt a. M. 1951. S.18. 『ヘルダーリンの詩の解明』手塚他訳、『ハイデッガー選集』第3巻理想社昭和四〇年、三版、二四頁。また、『ヘルダーリンの詩の解明』の訳者あとがきで、訳者は、「おそろしく『存在と時間』以後のハイデッガーは、およそあらゆる詩人のうち最も純粹無垢な詩人といふことのできるヘルダーリンにひたすら傾倒しつづけ」たと推測する。さらに、訳者によれば特にハイデッガーのこの書は最近のハイデッガー哲学をよりよく理解するための秘鍵のようなものであると述べているところからも、ハイデッガー晩年の「回転」以後の宗教的保護性の存在論的な「生の肯定」が読みとれよう。(二一九頁手塚富雄他訳者あとがき参照)
- (36) ハイデッガー著、『ヘルダーリンの詩の解明』二四頁。
- (37) O. F. Bollnow, Neue Geborgenheit. S.27. 邦訳、三二頁。
- (38) O. F. Bollnow, a. a. O. S. 157. 邦訳、一七九頁。
- (39) S. Kierkegaard, Gjentagelsen, 1843. キルケゴール著、榎田啓三郎訳、『おそれと恐ろけ』、著作集五、白水社、一九六二年、六八頁。
- (40) 松浪信三郎著、『実存主義辞典』東京堂、昭和三年、一一五頁―一二六頁参照。
- (41) O. F. Bollnow, Existenzphilosophie, S. 131. 邦訳、二二二頁
- (42) ホルノー著、須田秀幸訳、『実存主義克服の問題』、訳者解題、二七九頁―二八二頁参照。